

ONE・全ては一つ —宗教哲学者 浅野信の思想—

増地ひとみ

ONE: All Is One
The Thought of Religious Philosopher Makoto Asano

Hitomi MASUJI

【キーワード】 ONE、浅野信、宗教哲学、生命哲学、生まれ変わりの思想

1. はじめに

本稿の目的は、宗教哲学者浅野信の ONE の思想を紐解き、その一端を紹介することである。その思想をさらに深く掘り下げたいと希望する人々にとっての、ガイドともなる。

日本において宗教や哲学、宗教哲学を研究し、論じ、発信している人々は数多く存在するが、浅野信の説く ONE の思想は、宗教哲学に生命哲学が融合した「宗教生命哲学」と言えるものである。それはほかに類を見ない広さと深さを持ち、古今東西の宗教に関する浅野信の膨大な知識と思想的な基盤に支えられている。いつの時代を生きる人々にとっても必要で、求められる思想である。しかし現在のところ、浅野自身もその思想も、世間一般に広く知られているとは言いがたい。それを世に向けて発信することは、現在と未来を生きる全ての人々に資することになると考え、本稿を起こした。

2. ONE の思想を紐解くにあたって

宗教哲学博士である浅野は、「総合アドバイザー」として人々の相談に応じている。その主な手法は「リーディング」と呼ばれるものである。これについては後述する。また、日本全国各地に赴き、講演会等を通して ONE の思想を説いている。浅野は相手や場に応じてさまざまな切り口から ONE を言語化し、相談者や、講演の依頼者のニーズに応える。そのため、後述するように ONE はさまざまな言葉で表現される。それらは既刊の書籍にも収録されている。その ONE の、最もわかりやすく腑に落ちる説明は、「全てに通じる一つの原則」¹であろうと筆者は考えている。その「一つの原則」とは、天の規範である。例えば「必要なことは必ず起きる」²という原理原則はその

1 浅野信 (2017) p.23, p.218

2 浅野総合研究所 会報誌『interfaith』2025年10月、No.412、p.42

一つであるが、裏を返せば、「起きたということは、必要であった（必要である）」ことを意味するのである。

浅野の ONE の思想には、前提となっている考えがある。それは、「人は輪廻転生している」というものである。いわゆる「生まれ変わり」である。この大前提に立つことなく、ONE の思想を理解することは困難である。そこで、次章では生まれ変わりに関する科学的研究について示し、以降は人が輪廻転生していることを前提に稿を進める。さらに、ONE の思想の前提となっている今一つの考えに、「宇宙には全てを司っている大いなる存在が在る」というものがある。「神」などと宗教で表現される概念である。ONE においては、輪廻転生もその計画のもとでなされているとされる。なお、浅野の書籍や教えには、現在の世の中で「宗教」というフィールドで使用されている用語がしばしば登場する。しかし、浅野自身はどの宗教宗派にも所属していない³。浅野の思想をいわゆる「宗教」という枠組みで捉え、理解しようとするならば、本質を見誤ってしまうだろう。一方で、円滑なコミュニケーションには共通言語が必要である。現時点では、既存の共通言語によって ONE を表現し、説明せざるを得ない。本稿も必然的にそうした用語を用いながら記述することになる。

3. 生まれ変わりに関する科学的研究

NHK 放送文化研究所の調査では、4 割以上の日本人が「輪廻転生」「死後の世界」があると回答し、若い年代ほど「ある」と考える人が多いという結果が示されている⁴。日本人は古来、「生まれ変わり」や「前世」に馴染みが深い民族だと言える。小説にせよ、J-POP にせよ、前世を扱った作品は多く存在する。例えば、三島由紀夫の『豊饒の海』は、輪廻転生を描いていることで知られる（中尾莉奈 2016）。この作品は、平安時代の古典『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語であると三島由紀夫自身が述べている⁵。2016 年には「前前前世」という楽曲が発売され、映画主題歌賞を受賞している（Sony Music Labels Inc.）。日常生活でも、「私の前世は〇〇だったのかも」「生まれ変わったら…」等と口にしたり耳にしたりすることがあるのではないだろうか。心のどこかで、「自分の人生はこの数十年だけではない」と考えているのかもしれない。これは、日本で生まれ育った者の奥深くに脈々と流れる人生観の一つと言って差し支えないであろう。

この「生まれ変わり」は、科学的に研究され、研究成果が蓄積されてきている。飯田史彦（1995）「「生きがい」の夜明け」においては、それまでの「死後の生命」と「生まれ変わり」に関する国外の先行研究が詳細にまとめられ、人間が生まれ変わり、過去に幾度かの人生を経てきていることを実証する研究成果の数々が紹介されている。この飯田の論考は経営学の観点から執筆されたものであり、これらの生まれ変わりに関する科学的研究の成果が、人間にとって「生きがいの源泉」となる事実を示すことを目的としたものである。そこでは、我々人間一人ひとりを導く指導役

3 浅野信（2016）p.230

4 西久美子（2009）pp.72-73

5 三島由紀夫『豊饒の海』第一巻「春の雪」巻末後註

の魂の存在にも言及されている。飯田は、生まれ変わりに関する研究成果は、生まれ変わりに懐疑的な論者を「主観的には信じたくないが、客観的には認めざるを得ない」という複雑な心境へといざなうに十分な説得力を持っていると述べる (p.91)。飯田の「『生きがい』の夜明け」は、「生まれ変わり」を正面から取り上げ、日本語で書かれた学術論文の嚆矢である。日本の学術分野で「生まれ変わり」に関する科学的知識を豊富に提示した点で、発表後 30 年を経た現在も重要な位置づけにある。現在では科学者、研究者の手になる輪廻転生に関わる書籍等が多く出版されるようになっている⁶が、その突破口となったのは飯田の「『生きがい』の夜明け」であろうと筆者は考えている。

ほかに「生まれ変わり」や「輪廻転生」に関連する研究成果として、身内を失った遺族が輪廻転生の考えにより心の安定を図っていたとする宮林幸江 (2016) の論考がある。また、村上祐介 (2024) では、輪廻転生があるという信念が、他者に資する「向社会的な行動を促進し得る」という実験結果が示されている (p.32)。これらの論考は生まれ変わり自体を証明するものではないが、重要なことは、輪廻転生という概念が人々の心に安寧や肯定的な変化をもたらすことが事実として報告されていることである。このような「生まれ変わり」を「存在するもの」として展開されるのが、浅野信の ONE の思想である。

4. 浅野信の来歴と思想形成に影響を与えた人々

浅野は、先述したとおり、どの宗教宗派にも所属していない。そして、どの宗教宗派、教団をも否定、排斥しないことを明言している⁷。浅野の説く ONE の思想は、既存のあらゆる宗教宗派や形を超えた、中立的で本質的なものだからである。しかし、無所属であっても無信仰者、無神論者ではない。これを浅野自身は「超宗派の深い根本信仰者」と表現している⁸。

浅野は現在、株式会社浅野総合研究所 (Asano Research Institute、略称「ARI」^{アールイー}) の代表を務める。冒頭で述べたとおり、総合アドバイザーとして活動する宗教哲学博士である。ONE の思想をより深く理解するため、浅野信の来歴、また、浅野の思想形成に影響を与えた人々について確認しておきたい。以下にそのエッセンスを述べる。

浅野は 1954 年に茨城県日立市で生まれた。父親の浅野春三は、無教会派キリスト教伝道者として著名な矢内原忠雄⁹にも師事した無教会系の教育者であり¹⁰、熱心なクリスチャンであった。21 歳の時には「我が救はれしは世を救はんが為め也」¹¹と信仰への決意を木製の枕の裏に墨で書き、60 年以上にわたってその枕を愛用していたというエピソードが残る¹²。浅野はそのような敬虔なく

6 例えば、大門正幸 (2021・2025)、竹倉史人 (2015) など。大門氏は、「肉体は消えても魂は存在し自分たちをいつも見守ってくれていることを実感し、そう思えることの大切さを痛感」したという。科学的に証明できるか否かという次元を超え、輪廻転生という人生観が人間に肯定的な影響を与えることがここには示されている。

7 浅野信 (2016) p.231

8 前掲書 p.232

9 コトバンク『デジタル大辞泉』「矢内原忠雄」の項 <https://kotobank.jp/word> (2025 年 10 月 15 日閲覧)

10 2025 年 4 月発行、ARI の「総合案内書」より。

11 「私が救われたのは、世を救うためである」(筆者現代語訳)

12 上野正治 (1993)、浅野信 (2017) p.35

リスチャンの父親のもとで育ったが、春三は仏教その他にも造詣が深く、特定の宗教を家族に強制することは一切なかった¹³。浅野は、当初は医者になることを志していたが、それは叶わなかった¹⁴。浅野は自身の思春期、青年期を「不安定で、生きていてとてもつらかった」¹⁵と述懐する。そのような中で、17歳頃から哲学、思想、深層心理学などに深い関心を寄せるようになり、探求を始めた¹⁶。そして19歳の時、ゴータマ・ブッダの思想と出会う。それは「あまりの衝撃」であったと浅野は振り返る¹⁷。また、27歳の時、1981年にはエドガー・ケイシーと本山博氏の輪廻転生に関する書物に出会い、人が転生していることを確信したのであった¹⁸。

エドガー・ケイシーは1877年から1945年までアメリカに生きた人物で、「リーディング」を行っていたことで知られる¹⁹。「リーディング」とは、英語で書くと“Reading”であり、「読む」ことを意味する。過去・現在・未来を超えて宇宙の全てが記録された記録庫²⁰から、問いかけに応じて必要な情報を読み取る業である。浅野は書物を通して1981年にエドガー・ケイシーと出会い、のちの1992年、自身もリーディングをする者となった²¹。その間には、アメリカで当時リーディングを行っていた人々との出会いがあった。なかでも、エドガー・ケイシーの流れをくむポール・ソロモンに7年間師事し²²、リーディングに関する教えをじかに受けたことは、浅野のその後の活動に多大な影響を与えた。

日本においても、先述した本山博氏や翻訳者の山川紘矢・山川亜希子氏、船井幸雄氏、瓜谷侑広氏らとの交流が、浅野の精神的基盤の形成に重要な役割を果たした。瓜谷氏が社長を務めていたたま出版から、浅野はデビュー作をはじめ複数の著作を刊行している。瓜谷氏は、浅野を現代の世に送り出した立役者の一人であると言えるであろう。そして、父親である春三の精神性を浅野が受け継いでいるのは言うまでもないことである。

さて、「浅野の思想形成に影響を与えた人々」と言う時、そこには歴史上の人物たちも含まれてくる。すなわち、イエス・キリストの思想と、ゴータマ・ブッダの思想との出会いである。キリスト教の淵源、仏教の淵源との出会いとも言い換えられる。浅野の思想とそれを表現する言葉は、古今東西の哲学や宗教に関する幅広い見識に支えられている。それは、浅野の著作を読めば看取できる。浅野のリーディングとその背後にあるONEの思想は、古今東西の哲学、宗教全てを包み込むものである。既存のどの思想・宗教とも異なり、同時に、同一である。全てはつながっていて、一

13 浅野信 (2024) p.209

14 浅野信 (2015a) p.195

15 浅野信 (2017) p.136

16 浅野信 (2024) p.209

17 浅野信 (2023) p.220

18 浅野信 (2024) p.209

19 サグラー (1989) 訳書 pp.3-5

20 浅野信 (1997) p.223

21 リーディングにおいては、「宇宙には全てを司っている大いなる存在が在る」ことが前提となっている。浅野が行うリーディングは「ヨハネ・ペヌエル・リーディング」と呼ばれる。「ヨハネ・ペヌエル」は、浅野がリーディングを行う際に使用している、浅野の「本質の心」の名前である (浅野 1997, p.219)。ヨハネ・ペヌエル・リーディングは、2025年10月時点で18,000件以上実施されている。

22 浅野信 (1997) 著者紹介

体だからである²³。これがすなわち、「全ては一つ」であるという ONE の思想である。

5. ONE の思想—全てはつながっていて一体である

本稿の冒頭で、ONE の最もわかりやすく腑に落ちる説明は「全てに通じる一つの原則」というものであろうと述べた。「全てに通じる一つの原則」が機能しうるのは、「全てはつながっていて一体である」ためである。この「全てはつながっていて一体である」という言葉が、浅野の提示する ONE を最も端的に説明している。「一つである」という事実、「対象と一つになる」こと、「全ての源があり、全ての源は一つであり、全てに通ずる」こと、この3点が ONE であるとも説明される²⁴。また、ONE とは「愛である」と述べられていることも忘れてはならない²⁵。本章では、浅野自身の言葉を借りながら ONE の思想を紐解いていく。

浅野自身「ONE というキーワードで、いろいろなことに当てはめて真理を説いています」²⁶と述べるとおり、ONE はさまざまに表現される。まず、ONE とは生活の知恵であり、誰にとっても生きる上で役に立つ考え方であり、かつ、実践可能である点を押さえておきたい。その観点から、浅野の思想は生活哲学と実践哲学が融合した「生活実践哲学」とも呼ぶことができる。

浅野の著書の中でも、2012年に刊行された『ヨハネ・リーディング入門』は1冊全てが ONE の解説書となっており、他の著作物においても ONE についての記述は多々ある。その全てを本稿で紹介することは到底不可能であるが、ONE についての説明を抜粋すると、例えば次のようである。

わかりやすく言うと、「自分だけを考えて一人で頑張るよりも、周りとも認め合い、協力し合って、仲良く一緒に使命を遂行していきましょう」ということ。(中略)一人ひとりが活かされ、全体に寄与し、それによって全体が成り立ち、一人ひとりもその中で生きていける。²⁷

こうして学んだことを自分の置かれている状況で応用実践し、周りの助けになっていくこと。それこそが神の働きであり、愛なのです。これが結局自分のためにもなってくる。周り自分とはつながっていて、ONE だから。²⁸

自分と人は関連していますので、他の人々を大切にし、良くしてあげることが、そのまま自分を大切にし、自分に良くしてあげることになります。これが ONE の真理です。²⁹

自分のことも人のことも理解し、自分のことも人のことも適切に許してあげてください。人

23 2025年4月発行、ARIの「総合案内書」より。

24 浅野信(2012)p.75

25 前掲書、p.16

26 浅野信(2017)p.106

27 前掲書、p.178

28 前掲書、p.215

29 浅野信(2022)p.109

には誰にでも、優しく親切にし、分け隔てなく良くしてあげるのです。これが本当です。

これは宗教以前の命のマナー、命のルールです。それが ONE です。³⁰

世間では、人に優しく寛大で、自分に厳しいことが好まれますでしょう。でも、ONE の教えは違います。ONE の教えの目指すところは、「人に優しく、自分にも優しく」。これが ONE の目標です。³¹

愛には 8 種類あります。しかもその 8 つは一つです。ONE だからです。「自分と神さまとの関係」「自分と自分との関係」「自分と人との関係」「自分と自然万物との関係」。この 4 方面のそれぞれの能動型受容型で、合計 8 種類の愛に分けられます。

自分を基点に置いて、自分が神さまに愛され、そして自分が神さまを愛する。自分が自分に愛され、自分が自分を愛する。自分が人に愛され、自分が人を愛する。自分が自然万物に愛され、自分が自然万物を愛する。この 8 つです。

大事なことはこの 8 つの愛の、自分の傾向を知り、足りないところの愛を補強し完成させていくことです。³²

ONE ということの中には、違いの意味や意義を理解し、活かし合うということが含まれています。「全てが、ただ同じだ」ということではありません。それでも根底には共通のものがあり、全体の一部をそれぞれが成して、各構成要素になっているということでは共通という、一つの ONE のベースがあります。³³

人は個人であると同時に家族の一員であり、会社の一員であり、社会の一員でもあるのです。また、地球の自然の生命体の一員でもあるのです。一人の人がいろいろなところに所属していることを知って生きねばなりません。全てがつながり、関連連し、一つの流れの中で動かされ動いていることを見落とさないことです。³⁴

宗教と教育学と医療は、それぞれ別にされています。福祉や介護、ターミナル・ケアなども。それぞれに分かれていること自体は問題ではないのですが、それぞれが連携を図ってこそ本当のものが実現してくるのです。それが ONE の態勢であり、あり方です。

それぞれがありながら関連する分野と連携を図れば、専門の所だけで叶わないことも理解できたり、実現することでしょう。人間自体はトータルであり、一人の人間が、健康についても

30 浅野信 (2025) p.29

31 浅野総合研究所 会報誌『interfaith』2023年6月、No.384、p.65

32 浅野信 (2019) p.154。「能動型」は自分が愛すること、「受容型」は自分が愛されることを意味している。

33 浅野信 (2012) p.22

34 前掲書、p.120

教育についても、働くことについても、生きがいについても、信仰や宗教についても関わっている以上、総合的に見ていくことが突破口になることは多いのです。³⁵

ONE の学びは、「命を学ぶ」ということです。(中略) 輪廻転生のテーマも結局命のドラマであって、成長というのも命を育成することですし、使命というテーマも「命を使う」と書くから、やっぱり命を役立てる、自分を活かすということなのです。³⁶

ONE に基づいて生きることで寛容になり、自分の器ができてきて、どんな人、どんな存在や働きも理解し、協調してやっていくことを目指すことになります。これが今後の人類と地球のビジョン、理念と方向でしょう。³⁷

物事や人の否定的面ばかりを見ないこと。物事を悪いほうに悪いほうにばかり考えないこと。(中略) 表があれば裏もあって、その両方がセットになって一つである。それで全体を成している。それが ONE っていう実際のあり方です。何に対しても、これを当てはめて見ていくのです。だから、「どんな事でも人でも、認め、受け入れなさい」と言うのです。

もっと言うと、長所と短所というのは矛盾して、拮抗して共存しているというよりも表裏一体ですから、長所と短所は同じなんです。顔つきが違うだけです。「あばたも笑窪」って言うでしょ。だから短所と長所っていうのは、相反するものが自分の中に共存しているというよりも、同じものが違った顔つきを見せてるだけなんです。これが ONE の真理です。

その意味で、短所は直さないでください。短所を直した時には、長所も消えます。³⁸

このように、実生活にすぐに適用でき、役立つ心構えに関する実際的な指針を ONE は多く含む。浅野自身も、ONE ほど実際的な教えはないと述べている³⁹。

そして、2章で述べた「宇宙には全てを司っている大いなる存在が在る」という考えに基づく思想も、すでに膨大な分量が言語化され、残されている。その一端を紹介すると、全てを司る大いなる存在のもと、「事は因果の法則に沿って起きる」⁴⁰ のであるという。また、「現状とそこで起きることは、内容も程度も、その時のその人を表すものとなる」⁴¹ という。いずれも、ONE の思想において鍵となっている概念である。これらも、冒頭の2章で示した「必要なことは必ず起きる」と同様、「全てに通じる一つの原則」である。

浅野の名の「信」は、^{へん}偏と^{つくり}旁に分解すると「人」と「言」である。「^{ことば}言の人」の名のとおり、浅

35 浅野信 (2012) p.148

36 浅野信 (2015a) pp.133-134

37 浅野信 (2012) p.20

38 浅野信 (2015b) p.33

39 浅野信 (2017) p.208

40 浅野信 (2012) p.172

41 浅野信 (2017) p.134

野は言葉の力を熟知し、重要視している⁴²。自身の輪廻転生を通して、浅野は常に「言の人」であった⁴³。ONEの思想のさらなる詳細については、本稿の「引用・参考文献（浅野信に関するもの）」に挙げた資料等を参照されたい。

6. ONEを現代社会と日常生活にどう活かすのか

以上のようなONEの思想は、現代社会や我々の日常の生活にどのように活かすことができるのであろうか。

存在するものには、人でも団体でも、全て根拠と意味、目的と果たせる役目がある⁴⁴という立場から何ものをも否定しない浅野であるが、厳しい目も持ち合わせている。例えば、現代の科学技術への批判的なまなざしである。現代の科学技術や学問は縦割りで細分化されているため、専門に特化してしまい、さまざまな関連の中にある奥深い原因や学びが見過ごされる場合が多いと浅野は説く⁴⁵。この「縦割り」は、さまざまな物事が複雑化してきた現代における問題点、弊害の一つであろうと筆者も考える。しかしここで、一見無関連なことをONEの観点で総合的な知恵をもって見ること、根っこにある本当の原因がわかり、その根っこにある原因に対処することで、表面化しているさまざまな問題が解決する可能性が開かれると浅野は述べる。横断し、横の関連を見るのが本当の知恵であるというのが浅野の考え方である⁴⁶。

宗教に関しても、同じことが言える。現存する宗教は、多分に排他的である。それぞれの宗教において、自分たちの神仏を崇拜し、いわば限定された囲いの中で信仰したり学んだりしている⁴⁷。世界規模で見れば、宗教の対立が戦争にまで発展する場合はあることは周知の事実である。しかし、ONEの観点からすれば、大元は一つである。それぞれの宗教宗派は、「全てを司っている大いなる存在」への通り道にすぎない。これを浅野は、富士山の頂上に至る登山道に喩えている。「この宗教やこの教祖を通してしか人は救われぬ。ほかの宗教ではそれが叶わない」というものではないと断じる⁴⁸。しかし、世の中には、自身が信じ帰依する神仏を絶対視し、その他のものは受け付けぬという人々も存在する。浅野のスタンスは、各自が献身し御縁のある神仏は大事にしつつ、同時にその背後の大いなる存在を見据え、そこを目指して歩むというものである⁴⁹。この大いなる存在は、先の喩えにおける富士山の頂上であり、浅野は「根源」「本源」などとも呼んでいる。このスタンスに拠れば、他を排除する必要はない。全ての宗教が、そもそも一つの同じもの—ONEだからである。この考えに立脚すれば、排除と対立による争いも、起きようがない。なお、

42 浅野信（2013）p.199

43 例えば、直前の前世では日本人の小説家であった（浅野信 2021、p.30）。浅野のその他の具体的な前世については、浅野（2025）pp.54-55を参照。

44 浅野信（2017）p.133

45 前掲書、p.194

46 前掲書、同ページ

47 浅野信（2014）p.51

48 浅野信（2013）p.20

49 浅野信（2014）p.51

浅野は、「特定の宗教に入っているでもいいし、入っていないでもいい」と言い、どちらでも「信仰はできるし、救われます」と明言する。そして、宗教を否定する「アンチ宗教、反宗教」にならないようにと戒めている⁵⁰。本来の信仰は、とても自由で気楽であり、しかし身近に神を感じられて、神に守っていただけるものなのである⁵¹。

先に、「宗教の対立が戦争にまで発展する可能性がある」と述べた。言うまでもなく、戦争は他者を傷つけ、害する行為である。しかし、ONE の思想においては、全ては一つである。すなわち、他者を傷つけ害する行為はそのまま、自分自身を傷つけ、害する行為となる。同じことは、身近な所でも起きている。例えば「いじめ」である。全てが一つであり、一体であるならば、他者を傷つけることは自分自身、そして全体を傷つけ、破滅へと追いやる行為である。因果応報も結局はこの仕組みによっていると考えることもできる。また、先述したように、存在するものには、人でも団体でも、全て根拠と意味、目的がある。自分にとって都合が悪いからといって、一人間の判断によって排除したり消し去ったりすべきものではないのである⁵²。このことに思い至れば、他を害する行為に及ぶ前に立ち止まることができるであろう。

以上に述べた縦割りや排除は、ONE とは反対のあり方が具現化したものであると言えるだろう。ONE に立脚することによって、表面化しているさまざまな問題が解決へと向かうことが、現代において望まれている。ONE の観点から現代社会や日常生活を見た時に生じているずれを是正し、本来あるべき位置に戻すことで、解決、解消に向かうことも多いはずである。

7. おわりに

本稿の目的は、宗教哲学者浅野信の ONE の思想を紐解き、その一端を紹介することであった。浅野の著作には、古今東西の宗教に深く踏み込んだものも多い。一方で、人生の真理をやさしく説き明かした講演録も多数存在する。浅野が得意とする質疑応答により引き出された思想の数々も、文字化されている。本稿はその表面をなぞったに過ぎない。浅野の宗教観のほか、より充実した人生を送るための学びの方法、健康法など、日常生活で活用、実践可能な内容に本稿では触れることができなかった。

浅野が事象を解釈する時、それは全てが愛と善に基づいている。そうして紡ぎ出される言葉の数々は、今日よりも良い明日を願う全ての人に届けられるべく、開かれた状態で待機している。本稿で示し得たのは、それらの中の微細なひとかけら、大河の一滴である。その一滴の中に ONE のエッセンスを凝縮し、描き出せるようにつとめたが、筆者の理解や表現力不足により十分に伝えきれていない部分も多くあるものと思う。心のアンテナが反応したならば、原著に直接当たっていたのであれば幸いである。筆者としては、今後も浅野信の思想や言葉を別の角度、観点から紐解き、光を当てていく所存である。

50 浅野信 (2017) p.38

51 浅野総合研究所 会報誌『interfaith』2025年10月、No.412、p.70

52 浅野信 (2014) p.117

引用・参考文献（浅野信に関するもの）

浅野総合研究所ホームページ <https://asanosouken.co/vision/>

浅野信（1997）『アカシック リーディング 1998～2000』たま出版

浅野信（2012）『ヨハネ・リーディング入門』ARI 出版（以下、全て ARI 出版）

浅野信（2013）『命の本源に還る』

浅野信（2019）『命の法則』

浅野信（2014）『神とは何か』

浅野信（2020）『カルマの法則』

浅野信（2015a）『神と私』

浅野信（2021）『人は転生している』

浅野信（2015b）『神に祈る』

浅野信（2022）『天界の秩序』

浅野信（2016）『神と共に生きる』

浅野信（2023）『ブッダのダルマ論』

浅野信（2017）『理想社会の実現』

浅野信（2024）『アカシック・ビジョン』

浅野信（2018）『自分を生きて他を活かす』

浅野信（2025）『カルマ療法』

引用・参考文献

飯田史彦（1995）「「生きがい」の夜明け―生まれ変わりに関する科学的研究の発展が人生観に与える影響について」『商学論集』64(1)、pp.55-102

上野正治（1993）「弔辞―浅野春三先生に」「特集 故 浅野春三氏追悼」『シオン短期大学ニュース』45(4)

大門正幸（2021）『「生まれ変わり」を科学する―過去生記憶から紐解く「死」「輪廻転生」そして人生の真の意味』桜の花出版

大門正幸（2025）『生まれ変わりと臨死 7つの記録』ビジネス社

サグラー、トマス（1989）『川がある 上巻』光田秀訳、たま出版

Sony Music Labels Inc.「平成アニソン大賞」<https://www.anisong-taisho.jp/heisei/>（2025年10月13日閲覧）

竹倉史人（2015）『輪廻転生―〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語』講談社

中尾莉奈（2016）「『豊饒の海』論―三島由紀夫による「世界解釈」の視点」広島女学院大学博士論文

西久美子（2009）「“宗教的なもの”にひかれる日本人～ISSP 国際比較調査（宗教）から」『放送研究と調査』59（5）、NHK 放送文化研究所編、pp.66-81

宮林幸江（2016）「寓話（アレゴリー）の作成による遺族の死生観の明確化―現代遺族の抱く輪廻転生観」『宮城大学看護学部紀要』11(1)、pp.33-42

村上祐介（2024）「孤独感、輪廻転生信念と向社会的行動の関連」『宗教／スピリチュアリティ心理学研究』2(1)、pp.26-35